



漫画家

## 倉田真由美さん

今月のインタビューは、『だめんず・うぉ～か～』の著者である漫画家の倉田真由美さんです。倉田真由美さんご自身の経験、漫画執筆の過程での取材等を通じて得られた、男女関係、人間関係についての興味深いエピソード(全部を誌面に載せられないのがとても残念…)を伺うことができ、驚きと笑いに満ちた時間を過ごすことができました。倉田真由美さんの鋭い人間観察眼による、男女関係、夫婦関係円満のヒントも満載で、幸せをつかみたい人必見です。また、弁護士選びにあたって、倉田真由美さんらしい、鋭い視点を聞くことができ、弁護士業務にとっても貴重なインタビューとなりました。

(聞き手・構成：富田 寛之)

——倉田さんが、漫画家を目指したきっかけは、どのようなことだったのですか。

私のときってちょうど就職氷河期が始まってすぐぐらいなんですよ。就職活動はしたものの全然受からずに、どうしたものかなって考えたときに、消去法でいろいろ考えていって、私、漫画は描けたなみたいな。でも、少女漫画は昔、描いてはいましたけど、絵が下手で入選ってしていないんですよ。それで、絵が下手な漫画家でやっていけるとしたら何だろう。あんまり絵がうまくなくても描けるギャグ漫画だなというような、そんな感じで。

——『だめんず・うぉ～か～』を始めようと思ったきっかけは？

漫画家とは名ばかりのフリーター生活みたいなのを5年間ぐらいしていたんですけど、ようやく週刊連載の話が『週刊SPA!』から初めて舞い込んできて、「ページをあげますから何をしてもいいですよ」って、好きなテーマを選んでいいと言われたんですよ。それ

で、何をテーマにやるかなって考えたときに、週刊でやってネタが尽きなくて、しかも、男性が読んで興味を持てるものということを考えて、私が持っていた話の中で一番友達にして笑いが取れるネタがだめ男ネタだったんですよ。私自身がだめ男ネタがあったから、『だめんず・うぉ～か～』という漫画を描こうと思ったわけで、そういう意味では元を取らせてもらったなというのはあるんですよ。私だけのネタだとネタが尽きちゃうから、人からも集めて、その話を漫画にしたら、ずっと続けられるなという中で始まったんですよ。

——『だめんず・うぉ～か～』の連載スタートから好評だったのでしょうか。

そうでしたね。カテゴリ化したのがよかったんだと思うんですよ。

——漫画の中でばかみみたいなナンパの仕方をして、結構いい女がついてきちゃったみたいなエピソードがあるじゃ

ないですか。

あります。いっぱいあります。

——そういう手法をまねしたいとかいうような男性はいませんか。

うらやましがる男の人はわりといますね。まじめでちゃんとしている男性に多いですね。俺はこんなにまじめにちゃんとしているのに、「何でこんなだめなやつがこんなにいろいろなきれいな女の子と付き合い合っているんだ」みたいな、そういう男性は多いですね。

——逆にそういうだめ男好きな女性にとっては、そういうまじめな男性はちょっと対象外なんですか。

いやいや、そんなことはないと思いますよ。ただ、『だめ男』に出てくる男たちっておそらく何かはったりなり、何か女性に訴えかける魅力を持っている人が多いんだろうなとは思いますが。実際はだめ男の中でも女の人ともまったく付き合えない男たちもいるわけですよ。でも、私が漫画にしている人たちは女と付き合えるだめ男なので、そこには大きな差があると思います。それはおそらく口のうまさだったり、自己評価の高さだったり。

——女性と付き合えるだめ男は、自己評価が高いということでしょうか。

そうですね。しかも、異常に高い人が多いですね。それは同じちょっとだめだめな立場にいる男でも、俺なんか本当にだめだよと言っている人は確かに女性ってくっついてこないんですよ。同じだめだめで全然収入がなくても、働いていないとかでも、「俺は本当はこんなところにいる男じゃないぜ」みたいなのが最初、通用しちゃうりするんですよ。女の子も、勘違いしちゃうったりとか。プチ宗教みたいになったりしますね。

——女性がだめ男をつかまないにはどうしたらいいんでしょうか。

要は、自分と合わない男とか一緒にいてつらくなるような男とは付き合わないということなんですよ。私も自分のだめ男体験って、相手の収入とか、そういうことよりも自分と合わないんですよ。合わないから心の底から好きになれないし、尊敬できないし、何かどこかいつも不満があるみたいな状態になっちゃって。半端な気持ちで付き合っている、あんまり合わない相手だからだめなんだと思います。

例えば暴力を振るったりとかって外から見たときはだめ男と思うじゃないですか。でも、私がお会いした中には、「けがは治るけど、お金がないのは治らないじゃない」と言う人もいたりして。

だから、例えば、DVがあったとしても、「お金があって、外から幸せねと言われる生活がいいのよ」という人もいて、一概に何が悪いとも言えないんですよ。「お金がなくても優しいだめ男で幸せ」という人もいて、それが幸せじゃない人もいて、自分の幸せが何かというのは早く自覚しておいた方が失敗が少なくなるということですよ。周りが、「これは絶対にだめ男だと思うよ」というのが果たして本当にその人にとってのだめ男とも限らないし。

——合わないなとか思っても付き合っちゃう女性は、だめ男に何か魅力があるということでしょうか。

何か魅力みたいに思えるところがあるんでしょうね。だから、(女性と付き合えるだめ男は)男女の関係になるという、その一線の越え方がうまい人が多いんじゃないですかね。よく言う「いい人」という中には男女の関係になる、そのラインをなかなか越えられない人が結構いますよね。そういう人たちは、例えば、お見合いパーティーなんか私は取材で何回も行きましたが、いい人だけだねと言われるんだけど、なかなか恋愛というふうに結び付かない。

はたから見たときに条件は悪くないのにずっと残っているみたいな。

そういういい人は、結婚して、ある程度の安定が確保できればいいんでしょうけど、そこに至らないんですよね。距離感の取り方が致命的に下手というかね。相手の気持ちが分からないというか。つまり、空気が読めないんですね。だから空気を読める読めないって、やっぱりすごく大事ですよ。

——これまで、男女間の関係を取材されてきて、男女間の愛情についてどのように感じてますか。

本当に、愛情って人によって形が違うなどというふうには思いますね。だから例えばすごく好きな男性に振られたときとか裏切られたときに、全力懸けて復讐に行く女性もいるわけですよ。そんな女性もいれば、すごく好きなんだけど、好きな男性の結論をのんで、でも私は今でも待っているんだよねという女性もいるし。愛情の形ってそれぞれで、前者の女性からすると、「あきらめられるなんて、そんなに好きじゃなかったんじゃないの？」という言い方をするし、でも後者の私は待つというような女からすると、「好きな男なのに憎しみに変わるっていう気持ちが分からない」という。だからどの立場に立つか、どの価値観を持つかで全然違いますよね。

——倉田さんは、著書の中でも、ご主人が遊び人だったというようなことを述べてますが、結婚後はいかがでしょうか。

確かに、遊び人でしたね。でもすっかり何かそういうのはなくなっちゃいましたね。今では、もういいパパというか、まったくもうそれ以外の何者でもないという感じですね。

よく浮気する男はずっと浮気するとかと言うじゃないですか。でも、意外とそうでもないですね。だからどういう動機で浮気しているかにもよるし、遊

んでいるかにもよるんだろうなというふうに感じています。結構遊んでいる男性でも、落ち着く環境があれば意外に落ち着いちゃうときもあるということですね。

——夫婦関係がうまくいく秘訣はどんなところにあると思いますか。

価値観が違うという言い方、離婚理由にも本当にすごくよく聞きますけど、要は何が大事で何が大事じゃないかという順番の付け方が近い方がいいということですよ。違うとやっぱりぶつかりますよね。

私たち夫婦も、もちろん違うところもいっぱいあるんですけど、大事な部分で合っているんだと思うんですよ。私と夫って、将来に対する考え方とか。でも日々暮らしていく上で、「これってこうだよ」とか、みたいなことを言うと、たいがい同意を得られるというかね。

何かもっと簡単な例でいうと、見たい番組が似ているとか、小さなところでストレスがたまらないんだと思います。やっぱり、生活するって難しいのが、チャンネル権とか、部屋の温度設定とかも、一から十まで大変じゃないですか。人と暮らすって。それをどのぐらい自分に近い、ストレスの少ない生活ができるかということは、やっぱりある程度考えないといけないと思います。

——漫画を描いている取材とかの中で、今の実生活や今のご主人と結婚するに当たって、いろいろ役に立ったということは、何かあるでしょうか。

結局、人の話は人の話なので、自分にフィードバックできるかという点、そうでもないですよ。自分のことは、やっぱり自分が経験したことからでないと学べないですよ。本当に経験しないと分からないと思うことって、例えば私の前の彼氏って、料理がすごくうまい人だったんですよ。私、料理がで



自分のことは、やっぱり自分が経験したことからでないと学べない。だから、人の話を聞いて自分に役立ったなどということは、私はあんまりないですね。ただ、他人の話を知っておくと、いざ自分の問題にぶつかった時“気づき”が早くなります。

倉田 真由美

きる人と付き合ったらすてきだろうと思っていたんですけど、実際付き合ってみると、料理ができる男って、人の料理にうるさいことを言ったりするんですよ。例えばみそ汁のだしの取り方とか、「これ、煮干しで取った？」とか。それが私にとってすごくうとうとして、「ああ、こんなだったら料理しない男で何も言わない方がずっと楽だな」と思ったんです。今の夫がそうなんですけど、料理できないので、私が作ったものを唯々諾々というか、そのまま食べて、後片付けだけはするんですよ。それぐらいがちょうどいいなど。それって、付き合ってみないと分からなかったりするんですよ。

だから、人の話を聞いて、自分に役に立ったなどということは、私はあんまりないですね。ただ、人にアドバイスするときに、こういうケースがあったよみたいなことは言えますよね。他人の話を知っておくと、いざ自分の問題にぶつかった時“気づき”が早くなります。

——他の女性へのアドバイスなどで役に立ったことはあるということでしょうか。

一番よく言われるのが、「私だけじゃないと思ってほっとしました」ということですね。「私よりもひどい目に遭っている女性がいる、何かすごい気が楽になった」とか。だからそういう意味では、だめ男・だめ女話を集めていてすごくよかったと思うし、私自身もやっぱりそれで楽になったところはありますから。

これは特に女の人の傾向なのかなと思うんですけど、ほかの人と比べてどうかということがいつも気になっちゃう人が多いです。たぶん女って、共感の生き物だから、女友達やご近所など他の女たちが常に視界に入っているんですね。

ほかと比べてどうかみたいな物差しも、その人に根付いているものなので、無視できないんですよ。「人と比べるんじゃないよ」とか世間では言われますけど、でもそこが大事な人もいて、そういう人にとってはどうやっても無視できないことなんですよ。だからその辺の価値観って、私はすごく大事だなと最近思うようになって。というのも、私、自分が1回目の離婚をしたときに、本当に離婚してよかったと心の底から思ったんですよ。本当に楽になったし、

こんなに楽になるんだったら、何か結婚生活で悩んでいる人はみんなとっとと離婚すべきだわと思ったんですよね。それで、ずっとそういう意見でいたんですけど、私の身近な女友達が離婚するしないの話になったときに、うまくいかない男だったら離婚した方がうんと楽だよという話をして、その彼女と子供たちと遊びに行ったんですよね。そうしたら、その彼女が、一緒に帰るときもすごく落ち込んだ顔をして帰ってきて、楽しくなかったのかなと思ったら、「あの人って、お父さんがいなくて、だんなさんがいなくてかわいそうみたいなふうに哀れまれている気がする、こういうところに来るのがつらい」と言ったんです。私、そんなふうにしたことは一度もなかったから、びっくりしたんですけど、でもそんなふうに見世の中を見てしまう人にとって、離婚って私が思っているものとはきっと違うもので、私は楽になったけど、この人は楽になれないんだなということに気が付いて。だから、絶対楽になるよと全員に勧められることでもないんだなとそのときになって気が付きましたね。

——倉田さんは、弁護士についてどのような印象を持っていますか。

当たり前外れがあり過ぎますよね。看板に当たりって書いておいてって感じ(笑)。

自分も裁判を経験していますから、それで、弁護士って当たり前外れがすごくあると感じました。しかも何かフィーリングだなと。裁判って、経験するまではもっと厳密なものかと思っていたら、そうでもない。特に民事なんか、裁判官の胸先三寸で何でも決まるなみたいな印象を持ちました。だから裁判官の当たり前外れは引けないにしろ、弁護士の当たり前外れは自分で選べるから、何か当たりか外れか書いておいてほしいですよね。それがもうちょっと分かる世の中になったらいいなと思いますね。弁護士の成績表とか。

例えば何に強いとかね。もうちょっと分かりやすくしておいてほしいんですね。

——倉田さんが弁護士を選ぶ基準として特に意識していることはありますか。

私が、もしまだ弁護士を雇う必要がある場合、大事にしたいのは、恋人とか結婚相手を選ぶのと同じく、その人と基本的な考え方が合っていてほしいですね。具体的にその弁護士の考え方(事件に対する姿勢等)が分かるような案件なり何かネットなりで見られるといいですよね。弁護士は、依頼者の立場に立つことになるので、やっぱりその弁護士の基本的な物の考え方が知りたいですよね。心の中でどう思っているかって、人間だから大事だと思うんですよ。そういうところが透明化されると、もっと選択の自由があるのになと思いますよね。

弁護士探しは、結婚相手を見つけるのと同じような考え方だと思うんです。二人三脚でいろいろなかかる場合って、合っていないと、お互いが不幸なんですよね。相性があわなくて、もめるということも、作家と編集者なんかは本当にありますしね。弁護士さんと依頼人にもあるんじゃないですか。やっぱりそういうの。だから弁護士と普通の人たちの垣根が取り払われるような。もうちょっと身近になった方がありがたいですよね。

#### プロフィール くらた・まゆみ

1971年生まれ、福岡県出身。漫画家。「くらたま」の愛称で親しまれる。代表作は「だめんず・うぉ〜か〜」(扶桑社)。その他、「こんな男とは絶対、結婚するな!」(福島みずほ共著) (大和書房)、「わたしのままでママをやる」(WAVE出版)、「婚活迷宮の女たち」(ダイヤモンド社)、「婚活—その人と結婚するために」(王様文庫三笠書房)、「本当に憲法改正まで行くつもりですか?」(山口二郎、福島みずほ共著 倉田真由美挿絵) (実務教育出版) など著書・共著多数。2010年6月から2012年2月までNHK経営委員を務める。マンガ・エッセイなどの執筆活動のほかテレビ・ラジオ出演、トークショーと多方面で活躍中。